

眩しい太陽。透き通った空。高い雲。青い海。白い砂浜。  
たくさん海水浴客の楽しげな声とは裏腹に、ライフセーバーは神経を磨り減らしている。

人が溺れるのは数秒である。  
そして溺れる場所は、足がつかない場所が多い。  
位置にもよるが、そんなところまでレスキューボードを漕いで駆けつけるためには、60秒くらいはかかってしまう。  
その前に少しの兆候も見逃さずになんとかしてあげなければいけないのだ。

やんちゃ盛りの高校生くらいの集団が沖へ向かっている。  
だんだんと足がつかなくなって泳ぎ始める。  
その集団の中の一人が、集団から遅れ始める。  
集団はそれに気づかず、みんな前だけを見て沖へ向かって泳ぎ続ける。  
遅れた一人は泳ぎが得意ではないのだろう。きつくなり始めてスイムのピッチが速くなる。  
息を吸うためにアゴは上がり始め、アップアップしているように見えてくる。  
浜から見ているお客さんの一部は「あ！溺れてるんじゃないの？」と気づきます。  
先に泳いでいた仲間の集団も、一人が気づき、更に一人が振り返り「早く来いって〜」とチャカしているだけだ。  
その次の瞬間、力尽きて海底に沈むだろう。友人の目の前で。

さて、ライフセーバーはどの時点から対応するのか？  
一人が遅れ始めたとき??  
いやいや、それだと沈む直前に間に合うかどうかのタイミングにしか到着できない。

ライフセーバーの役割は、「救助」ではなく「予防」が主である。  
命は助かっても、怖い思いや苦しい思いは誰もが経験したくないことであろう。  
「救助」は最終手段に過ぎないのだ。

実はライフセーバーの対応は、集団が海に入る前から始まっている。  
タワー（監視塔）から、浜にいる近くのパトロールへ「沖に行きそうな集団が入水しにきてるよ」と無線が飛ぶ。

するとパトロールはこの集団に話しかける。フレンドリーに。  
「こんにちは」（挨拶と笑顔が一番大切。）  
「どこから来たの？」（こういう情報は何かあったときにとても重要な情報となる。）  
「何年生？」（これも重要な情報である。）  
「何人で来たの？」（遅れて追加で追いかけてたり、戻ってきたりする。その集団の最大値は知っておく。）  
「泳ぎが得意な子はいいる？」（苦手な子を聞いても教えてくれないことが多い。）  
「沖に泳いでいくの？」（今からどこに何をしに行きたいのかなどを聞いて、これらを予測する。）  
「あっちへ向かうと深くなるよ」（必要な情報を知って泳いでもらう。）  
「流れが右だから右に流されるよ」（右が深いところであれば左へ向かってもらう。）  
こうして情報を得ておくと同時に、意図せずに深いところへ行ってしまう溺れる事故は未然に防いでいく。

足がつかなくなり始めると、浜にいるパトロールはすぐにレスキューボードで追いかける。  
こうすることで、溺れる前に「大丈夫？泳げる？」と声掛けできる。  
「ちょっと厳しい」などと返答があれば、レスキューボードと一緒に帰ればいい。  
苦しい思いをさせずに、そのあとまた海水浴を楽しめるだろう。

これらを100%完全にできれば、溺水事故は限りなくゼロに近づくと思っている。  
先手先手の活動が、溺水事故の予防に繋がるのである。

新宮海岸へ海水浴にお越しの際は、まずライフセーバーに近づいてみてほしい。  
必ず、あなたや家族、知人、恋人たちの安全に繋がるはずだ。  
もちろん、何かがあればすぐに駆けつけます！

田原 幸佑  
新宮ライフセービングクラブ  
2010年に発足。任意ボランティア団体。  
現在27名のメンバーが在籍。  
<http://www.ab.auone-net.jp/~shingu/>